

伏見

世阿弥作

前

ワキ 藤原俊家

シテ 老翁

ツレ 男

後

ワキ 前に同じ

シテ かざはへの神

地は 山城

季は 秋

「誓ひすぐなる神詣で。く。宮路や絶えせざるらん。

「そもそも是は藤原の俊家とは我事なり。さても和州春日の明神は。氏の神にて御坐候ふ程に。此度参詣仕り。七堂の順礼事終り。今は下向道なれば。宇治より川舟に乗り。伏見の社に参詣申さばやと存じ候。

「朝日影。さすや三笠の山高み。く。佐保の川

霧立ちこめて。梢の秋も猶深き。四方の詠めも時めきて。猶行く末は泉川。河風さむみ宇治の里。過ぐれば是ぞ程もなく。伏見山にも着きにけり。く。

「異色はしをるゝ露の翁草。花ひとりなる気色かな。

「是も山路の秋なれや。

「伏見の沢の秋の水。

「それ世界に於て国の数。其品多き人界なれども。

二人「生まれて安き瑞穂の国。海原や波静かなる八島潟。

天照神の御末を受け。代々の天皇国を治め。民静かなる我等までも。皆朝恩の故ぞかし。殊更にこゝは所も九重に。近き伏見の宮造り。古きにかへる政事。道ある御代の其ためし。唯然るべき時とかや。

下歌「幣取り持ちて手向草。いく年々の秋ならん。

上歌「すべらぎの。万代までにまさり草。く。盛り栄

ゆく御影山。誰も頼みをかけまくも。かたじけなしや民として。そら恐ろしき地の恩。又天の恐れ数々に。漏るゝ事なき此君の。幾久しさも限られず。

ワキ詞「如何に是なる老人。御事を見れば柴取りやらんと見る所に。まことに盛なる白菊の。異なる花の種と見えたり。此花の在所ゆかしくこそ候へ。

シテ詞「さん候此白菊は。伏見山の谷水の辺に候ひしを。

神に手向の爲めに手折り持ちて候。

ツレ「うたてやな所からなる花と申し。しかも老人が持ちたる花なるを。などや翁草とは召され候はぬ。御心なきやうにこそ候へ。

ワキ「実にく菊をば翁草とも申すとかや。又所からなる花と申すは。此伏見の里に翁草を。よみたる在所の有るやらん。

シテ「いや此伏見の里を。必ず歌人のよみたる在所にてはなけれども。昔し伏見の翁と云ひし人。一花を捧げ此伏見山に出来す。彼翁国の助けとなりしより。世上に於て其名を得たり。

ツレ「其上伏見の翁の事。禁裏雲井の上人こそ。尤知し召さるべけれ。

シテ「古へ桓武天皇の。此伏見の里に宮作りせしに。翁一人顕はれいでゝ。一首の歌を申しゝかば。帝叡感甚しくして。伏見の翁と召されしより。

ツレ「されば昔の伏見の翁の。嘉例に任せて此里に。

シテ「今もかはらで此尉が。よし有り顔に持ちたる花を。

二人「翁草とは召されずして。唯白菊と御覧ぜば。せめてはまさり草となりとも。など御賞翫なかるらん。

ワキ「実にや名所に住む人として。世の常ならぬ心言葉。理すぐる有様なり。そも此花を手向とは。如何様当社の為めなるべし。いで此宮居はいづれの神

ぞ。

シテ「是は桓武の御願所。伊勢の御札の宮居として。御名も替はらぬ霊社なり。

ワキ「実にく聞きしにかはらずして。粧ひ異なる宮柱の。

シテ「鳥居も朱の玉垣に。

ワキ「玉の村菊立て添へて。

シテ「神前に捧ぐる手向草の。

ワキ 「其草の名も。

シテ 「尉が名をも。

地 「白菊の。花や伏見の翁草。く。白木綿添へて小

忌衣の。宜禰が立ち舞ふ粧ひ。神感にたへぬ納受
も。さぞなと思ふ夕神楽。夜を待つか月の都人。

まづ御神拝候へ。く。

ワキ詞 「猶々伏見の翁の事委しく御物語り候へ。

地クリ 「そもく伏見の翁の事。名も久方の天照らす。神

の代よりの末受けて。君道を守るためしとかや。

シテサシ 「然れば人皇代々を経て。時雨降り置ける檜の葉の。

地 「名におふ宮路正しくて。移り行くなり雲の上。花
の都の春の空。平安城に治まれり。

シテ 「中にも伏見の宮作り。

地 「国家を守る神心。知るや阿古根の浦までも。四海
の波は静かなり。

クセ 「人皇五十代。桓武天皇の御宇かとよ。当国伏し見

ての。里に移らせ給ひて。大宮作り始めつゝ。皇
居を定め給ひしに。伏見の翁は顕はれて。いざこゝ
に。我世は経なん菅原や。伏見の里の荒れまくも
惜しと。詠めけるとかや。其後巫に託しつゝ。猶
重ねての詔。我は神風や。伊勢の阿古根の浦の波。
治まる御代の為めならん。伏見に見そなはして。
君辺に住むべしとの。御神勅に任せつゝ。大宮作
りし給へり。

シテ「そもく伏見といふ事は。

地「まづ我朝の総名にて。伊奘諾伊奘冊の。天の岩座
の苔蔭に。伏して見てし国なれば。伏見と名づけ
給ふなり。さればにや。国富み民豊かにて。誰も
我世に合竹の。伏見の里を。守らんとの御誓ひ。
百王万歳に。平の都なるべし。

ロンギ地「実にや伏見のいにしへの。く。神の祭の夜神楽に。
心を述ぶる有難や。

シテ、ツレ

「折節月晴れて。和光の影も明らけき。いにしへの
宮はじめ。伏見の夢をおぼすなよ。

地

「夢の伏見の宮はじめ。其代を今に顯はして。

二人

「磨き添へたる玉殿に。

地

「今の翁の。

二人

「立つと見れば。

地

「天より金色の光りさして。此庭に満ちくゝて。伏
見の里の。あれまくも惜しと思ふ故。又宮作り改

めたり。我は伏見の翁なるが。御代を守り申すな
り。君は千代ませ千代ませと。申し捨てゝ失せに
けりや。申し捨てゝ失せにけり。（中入）

ワキ歌

「受くるや神の御心を。く。白木綿花の色々に。

神楽の鼓声すみて。月も異なる今宵かな。く。

後シテ

「あら有難の宮作りや。我をば誰とか思ふ。御代を
守りの聖賢には。伏見の翁と顯はれ。神道にては
伊勢の海。阿古根の浦に宮居して。古今妙文の詠

をのべん。かざはへの神とは我事なり。

地 「実に有難や今宵しも。空晴れ雲も収まりて。明々とある夜神楽に。

シテ 「焚くや庭火も照り添ひて。重なる霜の木綿畳。

地 「満てるや花も村菊の。

シテ 「紫の雪。

地 「緑の空の。

シテ 「月澄むや伏見の沢の秋の水。

地 「竹田も見えて稲葉の雲の。

シテ 「深草の野べ稻荷山の。

地 「紅葉の秋も柳桜の。花の都は曇りもなく。見えたりくや。平安城のおもしろや。

ロンギ地 「早曙の天の戸に。光りを添へて有明の。月澄み渡るめでたさよ。

シテ 「もとよりも。我代は経なん菅原や。く。伏見の里を守らんと。又此山に顕はれ。伏見の翁なると

かや。

地 「実に有難き神の代の。昔を今にかへすなる。

シテ 「其海原の波の露。

地 「こりかたまりし種なれや。

シテ 「今もゆるがぬ秋津根の。

地 「其神の代の。

シテ 「物語り。

地 「伊奘諾伊奘冊の。岩枕に臥して。見出だしたりし

故に。伏見と此国を。名づけそめられし神の代の。

跡明らかに今まで。天下泰平の政事。絶えぬ伏見

の翁草の。雪を廻らすや舞の袖。万歳の御代にか

へらん。く。